

# 120年で培った まじゅう 誠心の精神で現場力 技術力を磨き続ける



創業120周年記念式典であいさつをする代表取締役社長 松本 豊

6月1日に創業120周年を迎え、北九州市のリーガロイヤルホテル小倉で、創業120周年記念式典・祝賀会が実施されました。式典では、永年勤続受表彰者に社長から表彰状が贈られ、発明改善・功労・篤行表彰が紹介されました。

その後の祝賀会では、当社の120周年の歴史を映像で紹介。社長からあいさつがあり、参加者全員で乾杯して親睦を深めました。改めて参加者全員の気が引き締まり、さらなる社業の発展を誓いました。

## 4～5人のスタートから 約2,000人の従業員へ

創業120周年を迎えたのは、多くのお客さまや取引先、地域の皆さまのご支援、ご協力の賜物であり、また諸先輩、社員はじめ全ての皆さまのご尽力、ご努力のおかげであることに改めてお礼申し上げます。

1898年(明治31年)に官営八幡製鐵所東田第1高炉・第2高炉熱風炉のガス管工事を請け負い、1901年(明治34年)11月に完工したのが当社の最初の仕事でした。当時、社長の濱田 米次郎は弱冠23歳、4～5人の従業員からのスタートでした。その後、現在の新日鐵住金(株)殿に続く流れの中で、製鉄所建設にも同調しつつ事業拡大を行い、そこで培った技術・技能・知見を基に、エンジニアリング事業、シリコンウエハー事業を立ち上げ、また研究開発にも積極的な力を注ぎ、現在は約2,000人(4月末)の従業員を有

するまでになりました。

しかし、ここまでの道のりは決して平坦ではなく、諸先輩方の多くの苦勞と努力がうかがえます。一方、高度経済成長期と言われる、昭和30年から48年の間で、当社の売上高が実に100倍となっていることから分かるように、そこには将来への多くの夢と希望がありました。同時に、当社はお客さまに恵まれて、今日があることを忘れるわけにはいきません。

## リーマンショックと 2度の地震を乗り越える

創業100周年記念式典の濱田 陽平前社長のあいさつでは、「これから将来にわたって、事業を営めば、天災地変や時代時代の思いがけぬ波をかぶることもある訳ですから、事業の継続は難しいことでもあります」と言われていました。

実際、その後の20年間には、「リーマンショック」「東日本大震災」そして「熊本地

# 記念式典・祝賀会レポート



3



2



1



4



6



5

- 1 社長から永年勤続受賞者に表彰状が手渡されるとともに、一人ひとりにねぎらいの言葉がかけられました
- 2 受賞者代表として謝辞を述べる産機事業部の脇野 正輝さん(右)
- 3 鏡開き後、乾杯の音頭で親睦がスタートし、思い出話に花を咲かせました
- 4 「120th」の文字と「∞」のマークが光る創業120周年記念のロゴマークが升を裝飾
- 5 創業から120年の歴史を映像で振り返り、それぞれ感慨にふけりました
- 6 全社の勤続20年社員と本社・産機事業部・オートライフセンターの受賞者で記念写真

## 「誠心」を基にした現場力 技術力を次世代に引き継ぐ

震」が現実のものとなって襲い掛かってきました。労働災害をはじめ不測の事態に遭遇することも含め、事業継続の難しさを感じます。しかし、どんな時にも、全社員が一丸となり、また多くの取引先や地域の皆さまの力をお借りして乗り切ってきました。

この歴史を引き継いでいくのが、現在の社員はじめ全ての皆さん、そして将来入社してくる皆さんです。近年、世の中は、これまでとは比べようがないスピードで変化していることを実感しています。AI・IoT・ブロックチェーンといったテクノロジーや、少子高齢化による年齢構成のゆがみ、個々人の価値観の多様化といったことが挙げられますが、当社として柔軟に変えなくてはいけないものと、堅持しなくてはいけないものがあります。

次世代へ継承すべきものをしっかり取捨選択することが、新たな歴史を積み重ねていく上で、ますます重要になってきます。

そういった中で、この120年で培ってきた「誠心」を基にした現場力・技術力は、当社のコアコンピタンスであることは間違いないです。その力にさらなる磨きを掛けて、お客さまから高く評価され続けられるよう、次世代に引き継ぐものとして、日々誇りを持って安全かつ確実な仕事を行っていただきますようお願いいたします。

## 人口減少や少子高齢化に伴う 課題解決に取り組む

当社事業の源泉は優れた人材にあります。人間と異なり、企業には寿命がありません。当社の寿命が尽きるとすれば、生きるエネルギーである優秀な人材が枯渇して、前に進むことを止めてしまった時に違いありません。

人口減少や少子高齢化が進行する中での人材確保、仕事の効率化省力化、安全や規律と技術・技能の承継、そして新たな事業の創出などが喫緊の課題となっています。適時適切な指示・命令や報連相を通して、規律ある風通しの良い職場を構築し、解決すべき課題を共有し早期の解消に努め、全社員の衆知を結集して、時代の要請に即した事業展開につなげていきたいと思っております、よろしくお願いたします。

### お知らせ

創業120周年を迎え、企業活動の根幹となる「企業理念」「スローガン」「行動指針」を制定しました。「企業理念」を視覚化した、アプリケーションデザイン「コーポレートカラー」「ロゴマーク」「社名表記」「作業着」「社旗」「社章」「看板」「通勤バス・重機」についても、刷新されます。

創業120周年記念式典で一部お知らせしていますが、2019年初めに、はまゆうや120年史、ホームページで、ご紹介させていただきます。

濱田重工のDNAとして継承された社風「誠心」のルーツをたどる

# 誠心の軌跡

まごころ

1898 (明治31)年、明治政府は八幡の地に官営の八幡製鐵所を建設することを発表。大阪で製缶工として製缶技術を身に付けていた根っからの職人気質である濱田米次郎はこれを聞き帰郷を決意し、その年の5月、濱田組を創業する。

いよいよ  
日本で鉄を  
造る時代が  
きた！

これから  
日本の  
産業革命が  
始まる  
ばい！



官営八幡製鐵所



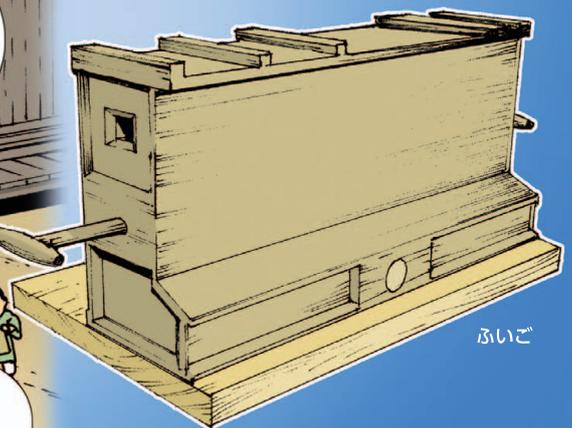
1901 (明治34)年、官営八幡製鐵所操業開始。  
東田第1高炉関係の仕事を受注し、1911 (明治39)年から請負業者として独立する。明治44年の戸畑製鐵工場(旧日立金属(株)戸畑工場)の七棟の新築組立工事と明治専門学校(現九州工業大学)の鍛冶工場、鑄物工場、水力実験室の組立工事も担当する。  
「請け負った仕事は、誠心誠意を尽くして必ず完全に成し遂げる」を信条とし、大正時代に入り製鐵所以外の仕事の請け負いができたのも、誠心誠意を尽くして得た信頼の広がりにも他ならなかった。また、大正に入り東洋製鐵150t、300tの高炉加工、組み立ても請け負った。

米次郎は弟子が独立して暖簾分けをする際、ふいごを贈り、鍛冶屋、製缶屋の独立を支援しお祝いのした。また、自宅に近所の子どもたちをたくさん集めて、お菓子をふるまい、「ふいご祭り」を開催した。鍛冶屋職人にとって、ふいごは大切な道具で、取り扱うには体力を要した。

さあ、好きなお菓子をたくさん食べてください！

わーい

ありがとうございます  
どうも  
ござい  
ます



ふいご



ガタガタ  
ガーン

お父さんが  
帰ってきた  
みたいだぞ

米次郎には7  
人の子どもが  
あり、その中の  
4番目の二男  
が、弟妹を気  
づかう満寿次  
である。

玄関を  
開ける  
音だ



1917(大正6)年  
米次郎は生まれつ  
き世話好きで町議  
会議員を一期務め  
たことがあり、親  
睦会などでお酒が  
入ると上機嫌で帰  
宅することが多  
かった。



米次郎は眠って  
いる子どもたち  
を一人残さず起  
こし、一列に正座  
をさせ訓示を述  
べた。

いいか  
お前たち  
よく  
聞けよ



満寿次が  
16歳の時  
のことで  
ある。



人間は決して  
嘘を言つては  
いけない  
正直で  
なくては  
ならぬ

そして、  
人の恩を  
忘れるな！  
人を見たら  
太閤さんと  
思え！

これは  
米次郎の  
口癖  
だった。



人を見た目や境遇などで判断してはいけない。特に職人は幾十年と続けていたら、すばらしい技術が開くことがある。だから、決して馬鹿にしてはいけないと教えた。

また米次郎は自分が学校に行かなかったこともあり、教育熱心で子どもたちには全員、大学へ行くようすすめた。



1921(大正10)年、東筑中学校を卒業した満寿次は、明治大学専門部の商科に進んだ。上京して以来、学業とアルバイトに精を出し、一度も帰省せず2年が経過した1923(大正12)年8月。母の強い希望で北九州に帰省した。その時、満寿次には忘れられない出来事が起こる。



関東大震災である。秋になって再び上京すると、鉄筋コンクリートの校舎は倒れずにそのままの形を残していた。



翌年の1924(大正13)年、満寿次は明治大学を卒業して筑豊の貝島炭鉱(株)に入社。同春、一年志願兵として小倉北方の野砲連隊に入隊し、翌年12月に除隊となった。



満州事変がはじまり、日本は軍閥が活気づく。景気回復の兆しが見えはじめて日華事変へとつながり、国内に軍靴の音が鳴り響いた。



満寿次は貝島炭鉱に復帰し、大阪に派遣されたが、昭和初期の日本は不景気の嵐が押し寄せて町には失業者があふれていた。誰もが解雇になってもおかしくない状況の中でも、満寿次は真面目に一生けん命働いていた。



1937(昭和12)年、満寿次に召集状が届いた。



初代濱田米次郎  
社長は、1939  
(昭和14)年  
3月31日に  
風邪のこじれ  
から急性肺炎を  
併発し、  
64歳で逝去した。



満州で  
兵役を終えた  
満寿次は  
日本に帰国後、  
訃報を  
受け取った。



初代社長の  
死去をうけ、  
濱田組の  
二代目を誰が  
継ぐかを、  
長男の幸次と  
二男の満寿次  
が話し合った。



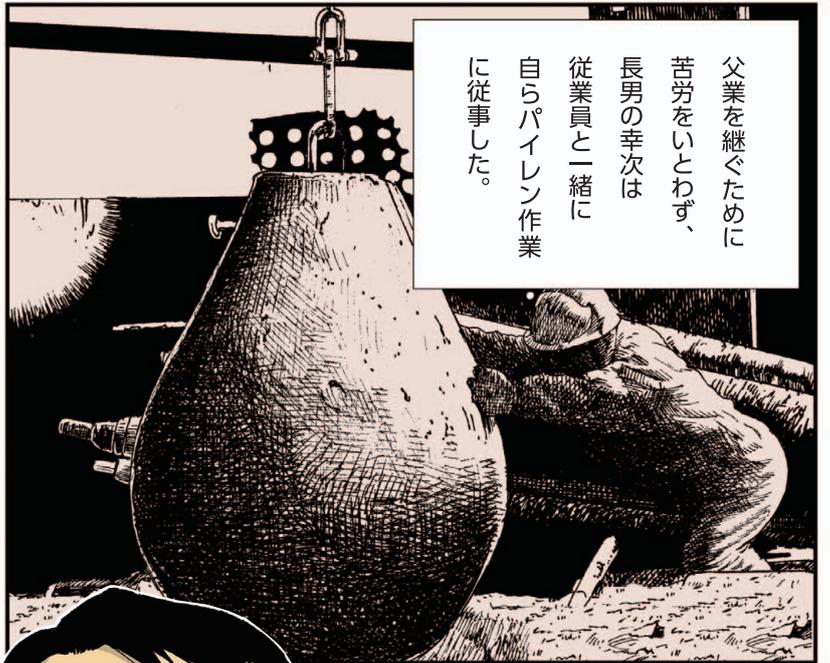
「もちろん父にもだが、貝  
島炭鉱にもこれまでお世  
話になってきた。いまこ  
で父の死去を理由に炭鉱  
を辞めることは、後ろ足で  
砂を掛けるようなもので、  
とても忍びない」と事情を  
述べた。満寿次は、長男幸  
次の二代目継承を熱心に  
説き、頼み込んだ。



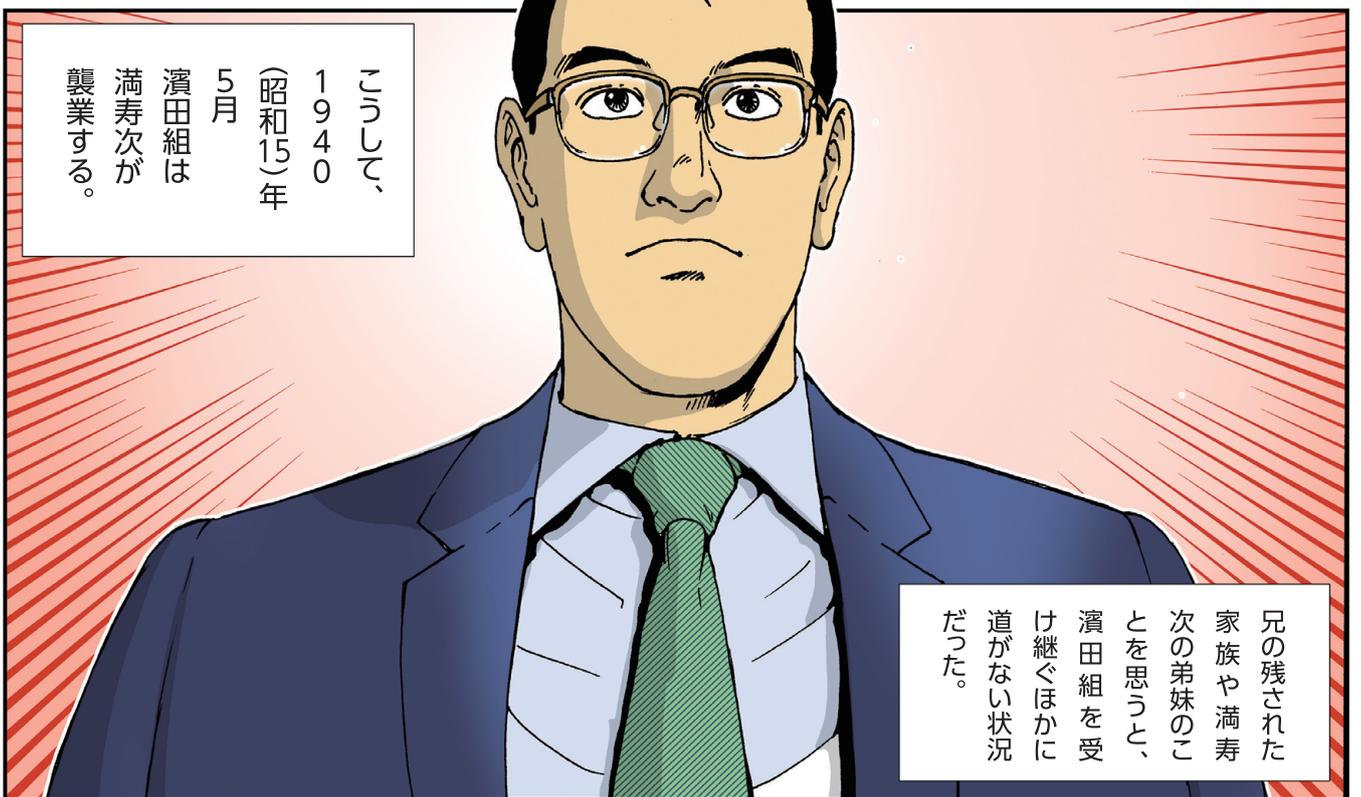
それから  
1939（昭和  
14）年長男の幸  
次が満州興業銀  
行を辞めて、濱田  
組を継ぐことにな  
った。慣れ親し  
んできた銀行業  
務とは全く異な  
る業界であった。



ところが  
1940  
（昭和15）年  
3月幸次は  
作業中に  
事故に遭って  
亡くなって  
しまった。



父業を継ぐために  
苦勞をいとわず、  
長男の幸次は  
従業員と一緒に  
自らパイレン作業  
に従事した。



こうして、  
1940  
（昭和15）年  
5月  
濱田組は  
満寿次が  
襲業する。

兄の残された  
家族や満寿  
次の弟妹のこ  
とを思うと、  
濱田組を受  
け継ぐほかに  
道がない状況  
だった。

米次郎亡き後、濱田組の業績は一向によくならず、残されたのは30人あまりの従業員と借金だけ。満寿次が貝島から受け取った退職金を全額つぎ込んで、焼け石に水だった。戦時中につき、食べ物や配給品のみ、身を粉にして働いていた。二代目に就任した満寿次にとって最も苦しい時代だった。



1945(昭和20)年、日本国中が敗戦ムード一色の中、先代の米次郎が、かつて八幡製鐵所の鉄くず切断作業を請け負った経験があったことから、兵器処理の仕事が次々と舞い込んできた。

「いいかお前たち、よく聞けよ。人間は決して嘘を言ってはいけない。正直でなくてはならぬ。そして、人の恩を忘れるな。人を見たら、太閤さんと思え」という父・米次郎の教えが満寿次の胸に刻まれていた。

嘘を言っては

いけない…

正直でなくてはならぬ…

人の恩を忘れるな…

まごころ

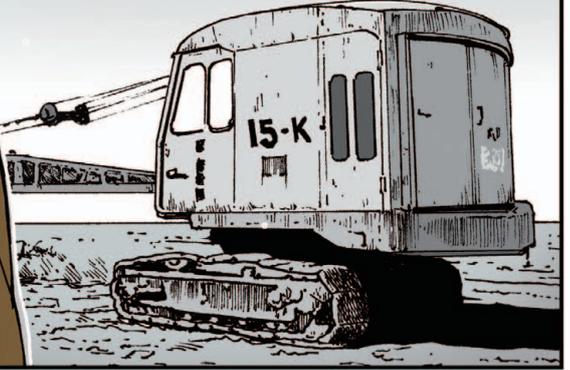
「誠心」だ

朝鮮半島で南北抗争が勃発し、日本経済に特需が舞い込み、濱田組は日に日に忙しさを増していった。今こそ近代化のチャンスだと考えた。



1950(昭和25)年6月、満寿次は法人組織「株式会社濱田組」に改組。昭和20年代後半から家庭電化時代がスタートし、30年代には、神武景気が訪れた。重機(クラムシエル・油圧プレスなど)の大胆な設備投資にも踏み切った。

日本の鉄鋼業の発展に伴って、八幡支店(1976(昭和51)年に本社から独立)に続き、1957(昭和32)年、山口県に光支店を開設。続いて、大阪に堺支店、北九州に則松工場と門司工場、千葉に君津支店と次々に開設した。



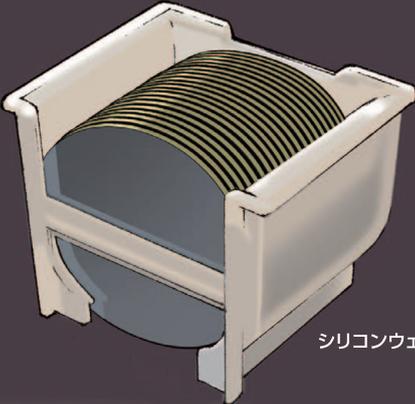


## 濱田重工(株)

HAMADA HEAVY INDUSTRIES LTD.

そして、1969(昭和44)年2月、「濱田重工株式会社」に称号を改め、社員の前で「製鉄関係の仕事のほか、他の分野にも力を入れたいと将来の目標を語った。さらには翌1970(昭和45)年9月、大分県に新たに大分支店を開設して盤石な経営基盤を築いていった。

1960(昭和35)年ごろ、「会社ロゴ」を社員から募集し、審査で決定



シリコンウェハー

1978(昭和53)年9月、創業80周年を機に、満寿次は社長の座を三代目の陽平に継がせた。陽平は既存事業だけでなく、満寿次が社員の前で語った「製鉄以外の分野にも力を入れたい」という思いも引き継ぎ、1985(昭和60)年当時、経営基盤の強化・拡大を狙って、積極的に新規事業開拓に取り組んだ。数々の失敗を重ね苦勞する中、シリコンとセラミクス加工の事業化検証を目的として、1988(昭和63)年2月千葉県君津市に精密加工センターを竣工した。その後、シリコンウェハーの再生ビジネスにおいて事業化の目的が立ったことから、熊本工場の建設を決断した。



「熊本工場」の前身となる「精密加工センター」はプレハブ棟だった(千葉県君津市)。

まごころ

そして1998  
(平成10)年6月、  
創業100周年  
の大きな節目を  
迎える。時代の流  
れが急速に変化  
しても、濱田重工  
に綿々と受け継  
がれてきた精神  
が変わることは  
ない。



四代目 松本 豊



三代目  
濱田 陽平



二代目  
濱田 満寿次



初代  
濱田 米次郎

2005  
(平成17)年  
9月、松本豊  
が四代目社長  
に就任し、  
濱田陽平が  
会長に就任  
して10年が  
経過した  
時も、  
四代目社長  
松本豊は  
こう語った。

濱田重工が  
次の百年を  
綴るため、  
創業から  
引き継がれて  
きた

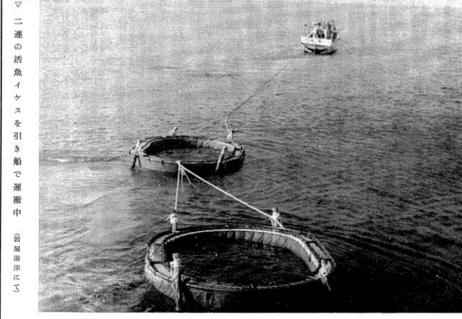
まごころ  
「誠心」を  
具現化する  
技術・技能・  
知識・経験  
に磨きをかける  
ことが  
重要である！

濱田重工には、  
「経営は人である」  
という信念が息づ  
いていた。人の心を  
大切にし、誠心誠意  
「まごころ」で接す  
る社風が一番大事、  
という考えのもとで  
ある。



1966年(昭和41年)10月

# 独自のな輸送用イケスを開発



二連の活魚イケスを引き船で運搬中の様子(画面右下にイケスの一部が写っています)

二連の活魚イケスを引き船で運搬中の様子がはまゆう第43号で紹介されました

**自主製品の生産を  
目指して**  
折たみ式活魚運搬用  
イケスの実用試験開始



▶ 青森湾で試験中のイケス

自主製品の生産を、折たみ式活魚運搬用イケスの実用試験開始。このイケスは、従来のイケスと異なり、船で引く際に船の揺れに耐え、魚が逃げない構造になっている。また、引く際に船の速度を落とさず、効率的に運搬できる。現在、青森湾で試験中である。

1963年ごろ、中小企業が発展を続けていくために自主製品の生産を目指しているなか、当社でも技術開発課が「活き魚輸送用のイケス」の開発を進めて販売しました。当社では、光工場、則松工場、八幡鋼管の開発になる鋼管製イケスを製作し、納入。それをきっかけに、水産業界との接触が持たれました。

魚をストックする小さなイケスから大きな養殖用、入江をせき止める大規模なイケスまで製作。社員からの公募で「ハマポーター」と命名され、材質や構造など進化を重ねて、客先から喜ばれていました。

# 宅地造成工事で弥生式遺跡発掘

1967年(昭和42年)9月

感田宅地造成地(直方市)で  
弥生式遺跡発掘  
二千年昔の生活を探る



▶ 貯蔵穴からの出土品  
▶ 住居跡の発掘状況

遺跡発掘が紹介されたはまゆう第55号

1967年9月号(第55号)で、当社が宅地造成工事を行っている福岡県直方市感田の八幡製鉄所の宅地造成で、当時から約2千年前のものとみられる弥生式遺跡が発見されたことが紹介されています。この遺跡からは、多数の土器や石器、砥石などが出土したとのこと。

直方市感田上原弥生遺跡発掘調査本部の手で、発掘調査を実施。当社社員が工事の納期を考慮しながら、遺跡の発掘に積極的に協力したことが記録されています。

1970年(昭和45年)3月

# ユニークな歩道橋を製作

1970年、自動車の増加に比例して、歩行者優先の交通規制が実施されるようになり、当社は歩道橋工事を受注しました。JR小倉駅前から国道3号線に通じる鍛冶町も、道路横断の際に歩行者が常に危険にさらされている現状で、歩行者の安全と車の流れの円滑化を図るために架設されるに至ったもの。すべてパイプ加工で優雅な美観の歩道橋は、製作に高度な技術を要求されるものでした。



ユニークな歩道橋平和通りに出現

# 鉄棒とすべり台を寄贈

1971年(昭和46年)5月

光支店社員の社宅のお子さまが通学している島田小学校が、1971年3月に体育館を新築。それを記念して鉄棒とすべり台の設置が決まり、光支店が寄贈することになりました。社員の奥さまの応援奉仕もあり、据え付けられたことが記録されています。



滑り台を上げる、光支店長とすべり台

**鉄棒とすべり台を寄贈**  
体育館新築記念に  
光支店

【要旨】光支店社員の社宅にお子さまが通学している島田小学校が、1971年3月に体育館を新築。それを記念して鉄棒とすべり台の設置が決まり、光支店が寄贈することになりました。社員の奥さまの応援奉仕もあり、据え付けられたことが記録されています。

当初は製作・発注を受けた案件ですが、2代目濱田 満寿次社長の想いで地域貢献へ(はまゆう第103号)

1972年(昭和47年)1月

# 戸畑鉱石の排水溝にエビが住む

1972年に、戸畑鉱石のク  
ラッシャー潤滑油冷却用水排水溝  
に、エビが帰ってきたことが紹介さ  
れました。直近5年、何も生物が



本号「エビ」は、戸畑鉱石のク  
ラッシャー潤滑油冷却用水排水溝  
に、エビが帰ってきたことが紹介さ  
れました。直近5年、何も生物が

## ようこそエビさん 取り戻したきれいな流れ

戸畑鉱石  
排水溝

1972年以前は、うなぎが生息  
(はまゆう第112号)

排水溝の温度は20度  
程度で、エビの卵や幼虫  
が水道を通って入り、う  
まく成長したことが紹  
介されています。

1972年(昭和47年)7月

# ドクロマークのバッジで安全活動

1972年7月号(第118  
号)のはまゆうで、全社的に見て  
も珍しいとされた大分支店の安  
全活動が紹介されています。

○個人安全カード：各人が自分  
の安全を管理するために必要  
事項を記入、常時携帯する。

○ドクロマークのバッジ：赤(不安  
全行為)と黄(服装違反)があ  
る。そのバッジをたて直した(二  
つで返納、渡す)。

○安全三人組編成：できるだけ  
同職種で編成、相互注意を徹  
底する。

○チェックポイントカード：自分  
の仕事の安全を守るために要  
点をカードに記入、毎日チエ  
ックする。

これは珍しい！  
大分の安全対策  
◇個人安全カード 各人が自分の安全を管理するために必要事項を記、常  
時携帯する。  
◇ドクロマークのバッジ 赤(安全行為)と黄(服装違反)があり、そ  
のバッジをたて直した(二つで返納、渡す)。  
◇安全三人組編成 できるだけ同職種で編成、相互注意を徹底す  
る。  
◇チェックポイントカード 自分の仕事の安全を守るための要点を  
毎日チェックする。

当時から安全の記事が  
多く掲載されていま  
した(はまゆう第118号)

1974年(昭和49年)5月

会社の中核となる

# 中堅技能員の研修がスタート

社内階層別研修の二環として、  
「第1回中堅技能員研修講座」が、  
1974年5月に初めて実施され  
14人が受講しました。現在の中堅  
社員前期研修の前身で、中堅技能  
員として監督者を補佐し、将来の  
役員者として、職場の仕事に効果  
的に進めるために必要な能力を高  
めることを狙いとしています。



第1回目は君津支店の  
受講者が多く、  
夜更けまで討議  
(はまゆう第142号)

中堅技能員の研修  
本 社  
第一部長 中野 隆  
第二部長 井生 義  
第三部長 佐藤 修  
第四部長 中野 隆  
第五部長 井生 義  
第六部長 佐藤 修  
第七部長 中野 隆  
第八部長 井生 義  
第九部長 佐藤 修  
第十部長 中野 隆  
第十一部長 井生 義  
第十二部長 佐藤 修  
第十三部長 中野 隆  
第十四部長 井生 義  
第十五部長 佐藤 修  
第十六部長 中野 隆  
第十七部長 井生 義  
第十八部長 佐藤 修  
第十九部長 中野 隆  
第二十部長 井生 義  
第二十一部長 佐藤 修  
第二十二部長 中野 隆  
第二十三部長 井生 義  
第二十四部長 佐藤 修  
第二十五部長 中野 隆  
第二十六部長 井生 義  
第二十七部長 佐藤 修  
第二十八部長 中野 隆  
第二十九部長 井生 義  
第三十部長 佐藤 修

1987年(昭和62年)4月

新規事業の一つとして

# 東洋蘭の栽培と販売

1985年に入り、新たな事  
業を開拓するために、新しく組  
織が編成されました。その二  
つが、君津支店新規事業開発プロ  
ジェクトチーム。収益力の向上と  
新規事業の展開をはかるため、  
1987年3月31日に蘭セン  
ターを開設しています。蘭セン  
ターは、君津支店保有の遊休地  
に設立され、主に「東洋蘭」の栽  
培と株分けを手がけました。当  
時人気があった蘭の2年後の発  
売開始に向けて、準備を進めた  
そうです。

1989年2月に  
は、木更津市のそごう  
デパートで開かれた東  
洋蘭展示会に、同セン  
ターで栽培した日本  
春蘭の「大雪嶺」を出  
展。審査の結果、約100鉢の東  
洋蘭の中から見事、「そごう賞第  
一位」に選ばれました。

## 東洋蘭の栽培と販売 蘭センターをオープン



蘭センターで栽培中の東洋蘭を紹介



最優秀に輝いた  
「大雪嶺」  
(はまゆう第333号)

君津「大雪嶺」が最優秀  
本 社  
第一部長 中野 隆  
第二部長 井生 義  
第三部長 佐藤 修  
第四部長 中野 隆  
第五部長 井生 義  
第六部長 佐藤 修  
第七部長 中野 隆  
第八部長 井生 義  
第九部長 佐藤 修  
第十部長 中野 隆  
第十一部長 井生 義  
第十二部長 佐藤 修  
第十三部長 中野 隆  
第十四部長 井生 義  
第十五部長 佐藤 修  
第十六部長 中野 隆  
第十七部長 井生 義  
第十八部長 佐藤 修  
第十九部長 中野 隆  
第二十部長 井生 義  
第二十一部長 佐藤 修  
第二十二部長 中野 隆  
第二十三部長 井生 義  
第二十四部長 佐藤 修  
第二十五部長 中野 隆  
第二十六部長 井生 義  
第二十七部長 佐藤 修  
第二十八部長 中野 隆  
第二十九部長 井生 義  
第三十部長 佐藤 修

1987年(昭和62年)12月

鉄冷えの時代、新規事業として始まった半導体事業

## 精密加工センター(千葉県君津市)地鎮祭

### 精密加工技術の研究・開発

#### 「精密加工センター」地鎮祭



社長を執り行う

当社は、千葉県君津市に「精密加工センター」を設置することを決定、十月十日午後二時から建設予定地の君津市坂田で

同センターの地鎮祭を挙行政。地鎮祭は快晴のなか、社長を祭主に、来賓の多くがね産業(株)の黒岩社長、工事担当の(株)日東工務(株)と日鉄電設工業(株)列席のもと、厳粛なうちに執り行われた。

同センターは、開発部がかねてから検討を進めてきた、電子材料および新素材などの超精密加工技術の研究・開発を行うもので、二月に工事を終え、三月にオープンする予定である。

同センターは、電子材料および新素材などの超精密加工技術の研究・開発を行うものとして設置(はまゆう第319号)

1998年(平成10年)6月

川添事業部長の100周年寄稿より抜粋

## ウエハー再生事業開始前の思い出

### 精密加工センター スタート時の思い出

それは一本の内線電話から始まった。受話器を取ると、かなりあわてた声飛び込んできた。「た、たいんです。アリの行列を作っています。思わず聞き返す「なに?」電話の音が繰り返す「アリさんが、クリーンルーム内で進行しています。情景を思い浮かべ、思わず笑いが込み上げてくる。当時、〇・二ミクロンのゴミを厳しく管理する必要があったクリーンルーム内の出来事。そのショックでよくピーカーの底が抜

後、事務所の片隅に殺虫剤が。素人集団でスタートした精密加工センター「熊本工場の前身」では、四・五坪のユニットハウスに機を三つ置いたもの、トイレは外口にひさしがなく、雨降ると濡れるので、社員が一日かかってひさを製作した。いかに手作りという感じである。しかし、翌日には強制撤去の憂き目にあつた。理由は読者のご想像におまかせするが、その日、事務所の内線が鳴ったかどうかは定かではない。

シリコンウエハー・川添浩

はまゆう創業100周年記念号にスタート時のエピソードを掲載(はまゆう第444号)

1985年ごろ、鉄鋼業界を襲った深刻な不況を受け、当社は積極的に新規事業の開拓に取り組んでいました。その一つとして、シリコンクラップの活用などの検討が重ねられた結果、シリコン素材の加工技術を外部から導入し、シリコン基板の加工を開始。シリコンウエハーの再生事業へと向かいました。

関係者の地道な努力が実り、1987年10月に、パイロットプランの建設が決定し、12月に精密加工センターの地鎮祭を実施。1988年2月、千葉県君津市に精密加工センターが完成しました。シリコンとセラミックスの加工技術開発、市場開拓を目的とした活動の始まりでした。

熊本工場の前身である精密加工センターは、君津支店の近くに土地を借りて、4.5坪のユニットハウスに機を3つ詰め込んだ事務所、屋外トイレ、プレハブ内に築造したクリーンルームという環境で始まりました。

石英ピーカーを電熱器の上に載せ、手で薬液を調合してから、ウエハーを洗浄していました。石英ピーカーが割れるトラブルも発生して、歩留まりや生産量を上げるために苦労しました。

スタート時は、何でも手作り。小さなシリコン片を洗浄するのにならざるを加工して使用するなど、ホームセンターにはたいへんお世話になりました。今では、自動洗浄が当たり前ですが、当時は、

また当時のクリーンルーム内では、0.2ミクロンのパーティクルを厳しく管理。室内でアリの行列を見つけて大騒ぎをするなど、素人ならではの失敗をたくさん経験したことが、その後の力となったと思います。

2011年(平成23年)1月

## タブロイド

### (新聞)版から

### 雑誌型へ

1963年7月に、タブロイド版として創刊された社内報はまゆう。このスタイルは、2010年12月号(第594号)まで、47年間にわたり継続しましたが、時流とともに2011年からA4サイズ化。また、2012年8月号から読みやすさのため、オールカラーへと変更しました。



現在の「はまゆう」

「はまゆう」創刊号1・2面



# 濱田重工 数字でわかる

資本金

# 3億2,604万円

2002年までは2億2,604万円で、2003年から現在の資本金になりました。



S-QC活動の全社提出件数

# 9,529件

1999年8月からの累計件数です。

提案活動の全社提出件数

# 254,344件

1999年8月からの累計件数です。

近20年の  
無災害連続日数

# 706日

2015年1月30日～  
2017年1月4日の記録です。

産機事業部で製作した最重量の製作物

# 607トン

2012年に納入した、新日鐵住金(株)八幡製鉄所向けスラグ積出設備シップローダが最重量。ちなみに、2番目は542トンの八幡製鉄所向け選炭スタックホイールローダ(2017年納入)、3番目は530トンの大分製鉄所向けシップローダ(2017年納入)です。

1年間に開催される  
社内階層別研修

# 22回

2018年度は19種類の階層別研修(うち3つは2回に分けて実施)が行われました。教育の内容も、時代に合わせて変化し続けています。

創業

# 1898年6月

保有車両・重機数

# 813台



累計ウェハー加工枚数

# 60,845,551枚

シリコンウェハー事業部開設以来、ウェハー再生技術で、世界のお客さまのコスト削減に貢献しています。





社員の平均年齢

# 38.4歳



社員数

# 2,009人

ハマダの総合力でお客さまへのサービスを提供しています。

当社にまつわることを、数字でご紹介。  
数字を見てピンと来るものが、いくつあるでしょうか？  
数字を通して、当社の歴史と現在の姿を実感してください。  
(数字はすべて2018年4月末時点のもの)。

社員のご家族の人数



# 1,541人

配偶者1,047人と18歳未満のお子さま494人の生活を守るため、全ハマダマンは安全最優先で操業しています。

男女比



# 94:6



男性が1,889人、女性が120人です。

会社名変更回数

# 3回

創業時は「濱田組」としてスタート。1950年、法人組織に改組し「(株)濱田組」に変更。その後、創業70周年(1968年)記念事業の一環として全社員から募集し、1969年に「濱田重工(株)」へと変更しました。

グループ会社の数

# 7社



アイコムソフト(株)、(株)エムエスシー、曾根オートライフセンター(株)、高千穂商興(株)、テンライ開発(株)、豊山(株)、HAMADATEC SDN. BHD. (ハマダテック社)があり、「誠心」のグループ経営に取り組んでいます。

産機事業部の  
クレーン製作台数

# 400台

288台の新作と、112台の改造を手掛けました。



濱田の「濱」の画数

# 17画

新入社員導入研修で「濱」の字を練習した時代もあったんだとか。

知財出願数

# 467件

1950年からの記録です。

太陽光発電事業の「まごころソーラー115」  
設置からの累計発電量  
飛行機で地球

# 約1,000周分の CO<sub>2</sub>削減効果

2014年2月に産機事業部の敷地内に設置。稼働開始からの累積発電量は約9,000,000kWで、産機事業部電力使用量の約20年間分に相当します。

※累積CO<sub>2</sub>削減効果:3,460t-CO<sub>2</sub>/地球1周分:3,600kg-CO<sub>2</sub>より





濱田重工グループ情報誌 はまゆう

120周年記念号 No.682 2018年7月15日発行

濱田重工株式会社 北九州市戸畑区牧山1-1-36

TEL (093) 883-2870

編集局長・畑瀬 将尚 編集長・古賀 明日香